

## ▽取組事例名

重要文化財「日土小学校」の保存と継続的活用

## ▽取組期間

平成21年～  
継続中

## ▽取組概要

平成21年6月に修復工事が完成した日土小学校校舎は、平成11年ドコモ20選に選定され、平成24年11月にはワールド・モニュメント財団／ノール モダニズム賞を受賞、同年12月28日には重要文化財の指定を受けた。

全国から見学依頼が殺到しているが、現役の小学校として使用しているため、見学等については、自ずと制約する必要がある。通常、学校教育の場となっている校舎は、児童への影響を考え、原則非公開としているが、関心の高さを考慮し、長期の休みを利用し年3回日土小学校のすばらしさを、多くの方々に共感していただきたいという思いから見学会を開催し、重要文化財日土小学校を全国に発信している。

夏休み見学会は日本建築学会四国支部の「夏の建築学校」と共催で実施している。

## ▽取組みの背景

日土小学校校舎は、八幡浜市役所の職員であった建築家松村正恒が設計し、中校舎と東校舎は、それぞれ昭和31年と昭和33年にかけて完成した。

設計を担当した松村正恒は、昭和22年から八幡浜市役所に勤務し、昭和35年には、『文藝春秋』誌で日本を代表する建築家10人のひとり選ばれた人物であり、市役所の職員として担当した学校や病院関連の建物の多くは建築雑誌や専門書籍に掲載された。

その中でも、日土小学校の中校舎と東校舎は、竣工当初より学界とジャーナリズム双方から高い評価を受け、さらに近年のモダニズム建築再評価の気運の中で、国際的にも注目を集める存在となった。その事実を象徴的に示すのが、平成11年近代建築の保存と調査のための国際組織DOCOMOMO日本支部によって、日本の近代建築20選のひとつに選ばれた。

その前後から、日土小学校のみならず、松村正恒および彼の作品全般についての再評価や研究がおこなわれ、一定の成果が蓄積されてきたと同時に、日土小学校の中校舎と東校舎に対する歴史的・文化的な高い評価も確固としたものになり、平成19年9月に八幡浜市指定文化財に指定された。

全国的に見ても古い木造校舎は、改修するのか、改築するのかという議論が顕著化し、問題となるが、日土小学校についても例外ではなく、地域を二分した議論が沸き起こった。

議論の末、八幡浜市教育委員会として中・東校舎の改修、不足教室の新增築の方針を決定し、その方針に基づき、平成20年9月から地震補強（中・東校舎）、新增築（西校舎）を実施し、平成21年6月末で保存再生工事が完成した。

多くの方々のご協力をいただき完成した日土小学校校舎は、数少ない木造校舎の耐震補強事例であると共に、文化財の改修方法を用いながらも、現代の建築基準法等に配慮した全国的に見ても稀有な校舎であることから、全国から見学の依頼が多く寄せられることとなった。また、この保存再生事業は国内外から高い評価を受け、2012年には日本建築学会賞（業績）とワールド・モニュメント財団／ノール モダニズム賞を授与された。

そして平成24年12月28日、戦後建築としては4番目、戦後木造建築としては初の重要文化財に指定された。

## ▽取り組みの狙い・具体的内容

### (取り組みの狙い)

文化財保護の柱は、「保存」と「活用」といわれる。文化財は、そもそもが、保存、すなわち守り伝えるべきものである。日土小学校は、文化財である校舎をその目的のまま日常使用している稀有な例であり、日常の維持管理が建物の保存につながり、同時に目的を継承することで、学校という建造物に設計者松村が込めた理念をも伝えている。

児童が教育に適した安全かつ機能的な施設で、豊かな学校生活を送ることが目的の第一である。50年余り前、児童の目線で、児童のために工夫を凝らして建てられた校舎は、決して古びることなく現在もその役割を果たしている。

現役の小学校であり重要文化財である日土小学校の見学会で、多くの方々に日土、八幡浜の良さを全国の多くの方々に知って頂きたい。

### (具体的内容)

公開は文化財の活用における重要な手法の一つである。日土小学校は、建築史上重要な位置を占める建造物であり、また、木造校舎の耐震補強や、使い続けることによる文化財の保存継承の先行事例としても注目を集めている。見学を希望する声も多いが、校舎は教育活動の場であるため、児童への影響や安全、プライバシーにも配慮し、通常は原則非公開、長期休暇にあわせて春・夏・冬年3回の校舎見学会を行なっている。校舎に直に触れ、その空間を体感できる貴重な機会であり、日土小の素晴らしさを知っていただくため、広く一般との重要な接点として、学校の協力を得ながら継続していきたい。

見学会では、学芸員によるガイドツアーを実施している。日土小を訪れる人々の反応が直接感じられる場でもある。ある見学者が「次はどうなっているんだろうと思って、また来たくなる」と述べていたが、まさにいま使われている学校だからこその感想であり、今後もリピーターの獲得を目指していきたい。

## ▽取り組みを進めていくなかでの課題・問題点（苦労した点）

日土小学校は建設当時から高い評価を得ていたが、時間の経過とともに、それがあたりまえになり、老朽化した木造校舎という認識が地元住民に広がっていた。それがドコモモ20選に選定されてから、外部からその価値について再認識させられることとなった。

しかし、平成15年から日土小学校校舎は「改修」か「改築」で地域住民を二分した議論となった。改修派は「よいものは残すべきだ」

改築派は「老朽化した建物では、地震等を含め児童の安全性の確保が出来ない」

両方の意見が対立し、議論は平行線を辿った。

平成18年3月に再生計画検討委員会の答申が出され、その答申に基づき教育委員会として、改修と不足教室の新築という、現行校舎を耐震性能を含め、児童の安全を確保し、使い続ける事を決定した。

この間、改修、改築の議論の犠牲となっていたのが、大人たちの対立を見てきた子ども達であり、悲しいことであった。

「よいものは保存すべき」という論理には、そこで生活している者の意見と全く違う方向に向かう可能性があり、地域住民とまちづくりの方向性を含め、合意形成をしっかりとしておくことが重要である。

## ☆工夫した点

「環境が人をつくる」と言われるが、日土小学校の校舎は子どもたちの健やかな成長を育む上で素晴らしい教育環境を創り出している。「学校の主役は、子どもであり、先生である」という設計者松村正恒氏の思いが込められた校舎は、子どもたちの安全・安心を確保しつつ、各所に仕掛けられた豊かな空間が、好奇心や想像力をふくらませたり、心の安らぎを与えたりしている。これらを感じていただくために、意匠などを50数年前の建設当時に復元している。

## ▽取り組みの効果

改修工事後の平成21年夏以降、17回の見学会にのべ3,918人が訪れた。決して交通の便がよいとはいえない場所であるが、毎回、市内、県内のみならず、遠く県外からも訪問者があり、多くの方が長時間、思い思いの場所で楽しげに過ごしている。

第1回 平成21年8月1日 (800名)  
第2回 平成21年12月27日 (158名)  
第3回 平成22年3月28日 (120名)  
第4回 平成22年8月8日 (182名)  
第5回 平成22年12月26日 (19名)  
第6回 平成23年3月27日 (74名)  
第7回 平成23年8月7日 (243名)  
第8回 平成23年12月25日 (84名)  
第9回 平成24年3月25日 (88名)  
第10回 平成24年8月12日 (391名)  
第11回 平成24年12月30日 (302名)  
第12回 平成25年3月31日 (412名)  
第13回 平成25年8月4日 (257名)  
第14回 平成25年8月11日 (241名)  
第15回 平成25年8月18日 (253名)  
第16回 平成25年12月29日 (55名)  
第17回 平成26年3月30日 (239名)  
見学者比率 県外49.8%、県内22.3%、市内27.9%  
新聞報道などは別紙のとおり

## ▽住民（職員）の反応・評価

国指定重要文化財となって、日本郵便四国支社がオリジナル切手(80円切手10枚、1シート1,200円)を1,000シート発行して頂いた。発売後1週間で完売し、追加で1,000シートが発売となった。見学会などで販売しているが多くの方に買って頂いている。日土小学校のPRに一役かっている。また、現役の学校であるが、観光資源として八幡浜市を来訪するきっかけとなっている。

## ☆取り組み効果を踏まえたフォローアップ

文化財である日土小が世代を超えて使い継がれることで、地域の核として人々を結び、ふるさとの誇りとしてあり続けることができる。松村が「学校の主役は子供であり、先生」と言ったように、地域の主役は地域の人々だからである。今後はボランティアガイドなどを育成し、市民とともに重要文化財日土小学校を守り、活用していきたい。

## ☆将来的な構想のほか、他団体へのアドバイス

過去の記憶なくしては、ひとは生きられない。これはつい先日のできごと、あるいは昨日の記憶についても同じである。しかし記憶は具体的な拠り所なくしては伝えられない。新聞、写真、記念碑などが記憶を呼び起こす。けれどそうしたものでなくとも、思い出の街角、聞きなれた歌、ある時期に流行ったドラマなどもまた、ひとの記憶を呼び覚ます。そうした記憶の拠り所のなかで、建物ほど多くの記憶を多くのひとびとに伝えるものはない。思い出の街角とは、見慣れた建物が建ちつづけている街角に外ならないし、建物は生活の記憶、ひとが生きた場所の記憶に結びつくからである。

学校建築は、そうした建築の中でも、とりわけ大きな記憶の容器である。数多くの児童生徒が学び、記憶を共有し、それが地域社会の記憶として広がっていく。学校建築が保存され、機能しつづけ、未来に亘って継承されてゆくことは、地域全体の未来を支える仕事となる。日土小学校の事例は、小規模校の保存・継承という、じつにささやかなものであるが、それが国の重要文化財として認められ、保護のシステムを勝ち取ったということの意味は大きい。

国が認めたからありがたいというような意味ではなく、日土の事例が他市町の建築の保存のメルクマールとなればと考える。

当市の今後としては、日土小学校以外の松村建築（旧長谷小学校、川之内小学校、旧図書館、中津川公民館）の保存再生に取り組み、重要文化財日土小学校に連なる松村建築を顕彰し、守り伝えることにより、「地域全体の未来を支える仕事」をしていきたい。